

奈良の名産 赤膚焼が出土

平城京跡（左京三条六坊十坪）・奈良町遺跡 奈良市高天町・高天市町・中筋町

奈良のみやげ物屋で、かわいい鹿やお雛様の絵が描かれた茶碗や湯飲みが光られているのを見たことのある人は少なくないでしょう。この焼き物は赤膚焼と呼ばれ、奈良市の西方の五条山で江戸時代の終わり頃から作られています。この赤膚焼が出土した発掘調査を紹介しましょう。

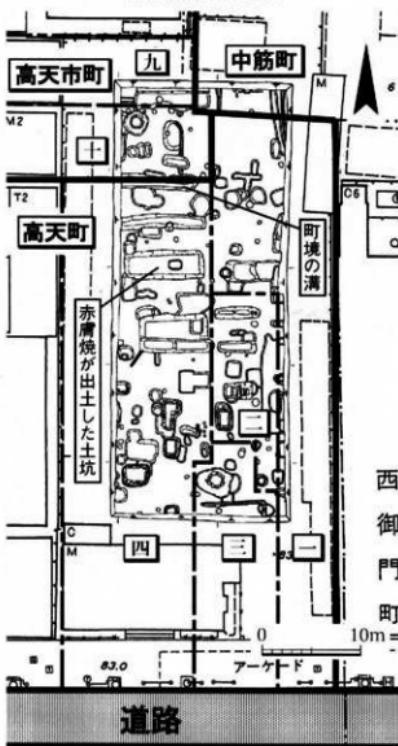
調査の概要 調査地は近鉄奈良駅のすぐ北側で、高天町、高天市町、中筋町の3町にまたがっています。奈良時代には平城京内にあたり、平安時代以降は興福寺の周辺の町から発展した奈良町にあたります。調査では、奈良時代から近代の各時代の遺構が約1200基と、遺物が整理箱で約1200箱見つかりました。遺構には井戸、柱穴、大小の土坑などがあります。特に平安時代後半の11世紀末頃からの遺構、遺物が数多く見つかっており、奈良町遺跡の成立を考える上で貴重な成果が得られています。

江戸時代になると、調査地は普通の町屋として利用されていたらしく、井戸、土坑、溝などの遺構が約200基見つかりました。土坑の多くはゴミ穴で、特に江戸時代後半に規模が大きくなり、中から大量の土器、瓦、木製品などが出土しています。

赤膚焼は江戸時代末頃の土坑から出土しました。土坑は、東西約8m、南北約3m、深さ約0.7mの大きなもので、壁の崩落を防ぐため壁際に沿って丸太杭が打ち込まれています。中からは大量の陶磁器や瓦が出土しており、建物の解体時などに出土したゴミを廃棄したものと考えられます。

江戸時代の文献や絵図から復元した宅地割りを発掘区に重ねあわせると、これらの遺構は各宅地内に納まり、宅地境を越えないことがわかります。また土坑は宅地の奥側に分布していることから、自分の家のゴミは、自分の宅地の奥側に掘った穴に捨てているものと考えられます。

また今の高天町と高天市町の町境部では、17世紀中頃の東西方向の溝（幅約1.5m、深さ約0.7m）を検出しました。町境のこの溝は、両町の町割りが江戸時代初めにさかのぼることを示しています。



発掘区平面図と推定宅地割り (1/500)

赤膚焼と江戸時代後半の陶磁器

赤膚焼は、奈良市の五条山で作られた焼物ですが、その開始時期は諸説あり不明な点が多くあります。しかし、江戸時代後半の寛政元年（1789年）に現在の五条山に開窯したことは、多くの研究者の認めるところです。当時都山城下の商人、住吉屋平蔵が、陶工の弥右衛門とともに開窯し、弥右衛門の没後、丸屋治兵衛（後、井上に改姓）が跡を継ぎ、郡山藩主柳沢保光から「赤膚山」の名前と「銅印」を賜ったとされています。

赤膚焼はその後、天保7年（1836年）に陶工奥田木白の出現でその名を上げます。「西大寺奉納楽焼茶碗」をはじめ、木白の名品は数多く伝えられています。また都山藩の御用商人で金融業者でもあった木白は、製造・販売にも大きな影響力を及ぼしたと考えられています。

調査で出土した赤膚焼は3点あり、いずれも底部外間に瓢箪印の中に「赤ハタ」と刻印が押されています。そのうち全体形が判明する2点を紹介しましょう。

1は小鉢で、赤褐色の胎土に暗いオリーブ色の釉薬を施し、内面には鉄絵で草と花の文様を描いています。丸く作った小鉢の口縁部にひねりを加え、平面方形に仕上げています。外面の下半部から底部は露胎（釉薬が掛からず地の胎土のままのこと）で、脇付部（器を置いたとき地面に接地する部分）脇に刻印があります。肥前の唐津焼を真似た作風のようです。同じものが伝世品にあり、箱書きには木白の印と花押があります。

2は皿で、浅黄橙色の胎土にオリーブ色の釉薬を施し、内面には白泥で刷毛目文様を描いています。外面の下半部から高台内までは露胎で、高台の脇に刻印があります。

これらの赤膚焼は一緒に出土している土器・陶磁器から、江戸時代末頃の19世紀中頃のものと考えられ、木白時代の作品と考えられる1の年代とも矛盾しません。この時期は、先にも記した奥田木白のもと赤膚焼は名声を得ており、今回出土のものもブランド品としての価値を有していたものと考えられます。

次に一緒に出土している陶磁器を見てみましょ

う。陶磁器の中で一番多く見られるのが染付で、蓋付の茶碗、湯飲み茶碗、皿などがあります。これらのは多くは当時の大生産地である佐賀県の肥前産や愛知県・岐阜県の瀬戸美濃産ですが、少數ながら兵庫県の三田産や産地不明のものがあります。また湯飲み茶碗などには同じ文様のものが複数あり、セットで使われていたことがわかります。この他滋賀県の信楽産の陶器の鍋や土瓶、灯明皿、兵庫県の明石産の陶器の擂鉢などがあり、各地の焼物で食器が構成されていたことがわかり、当時の活発な物流を物語っています。

また素焼きの土師器皿や、煙しをかけて表面を黒くした瓦質土器の火鉢などは、奈良産の焼物で、赤膚焼とともに奈良の手工業生産を語る上で貴重な資料となります。

これらの陶磁器を捨てた当時の住人の名前などは、残念ながら記録に残っていません。しかし出土遺物からは、高級品とまでは言えませんが、なかなか「いいもの」を持っていた人のようです。

